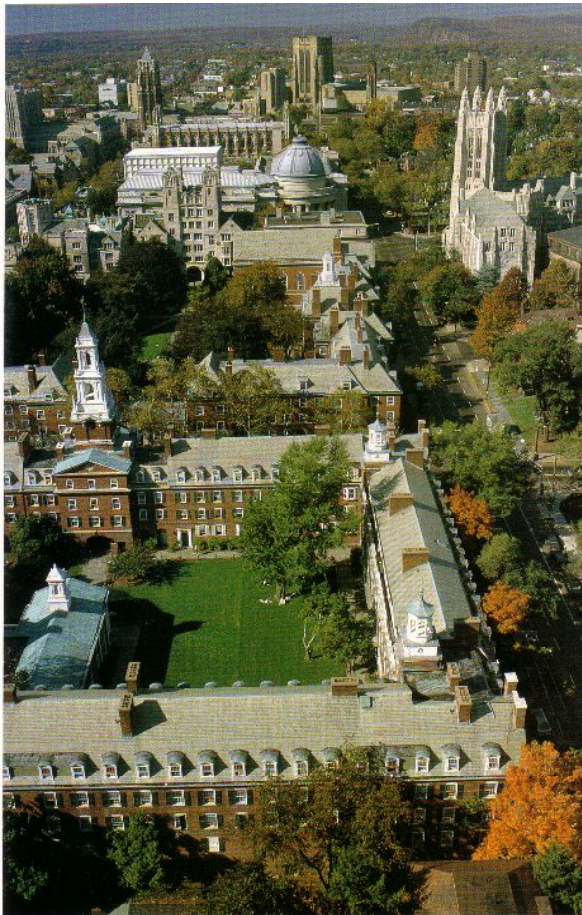


建築に夢をたくして

(アメリカ編)

プロローグ

2002年の10月の末、私はロスアンゼルスからシカゴ経由の飛行機で、コネチカット州に向かっていた。シカゴでの工事現場の視察とミーティングを終えて、イエール大学のあるニューヘブンに向かっていたのである。300年もの歴史のあるこの大学のキャンパスを訪れるのは、25年ぶりにもなる。ちょうど紅葉の時期なので、バケーションを兼ねて、かつてお世話になったホストファミリーと友人に会いに来たのである。



イエール大学のオールドキャンパス

イギリスのゴシック風の建物が並ぶキャンパスは、昔のままであったが、私はそれらの建物の細かい所まで良く見えるようになった。又、それらの建物から歴史と文化の重さのようなものも感じとれるようになっていた。当時は働きながらの学生時代だったので、それらの建築の価値を十分に認識する余裕がなかったのかもしれない。又、25年という歳月と建築家としての経験が、私の建物に対しての感覚を敏感にさせたのかもしれない。

私は、建築修業の旅に出る決意をして、アメリカに建築と自由を求めてやって来た。アメリカに来て、最初になつた大きな夢は、イエール大学の大学院に入学でき、建築の勉強ができたことであつた。かつて私が通っていた、ポール・ルドルフ設計の建築学部の建物や、ルイス・カーンのミュージアムを訪れた。かつての我々の学生時代と同様に、建築科

の学生達はボードを立て、ネットを上部に張り自分の空間を作ったドラフティング・テーブルの上でスケッチを描き、模型をつくり、話し合っていた。多少異なることは、コンピューターのモニターが所々に見うけられる様になったことである。ルドルフが設計した、この立体的なダイナミックな空間の建築学部の建物と、通りをはさんで建っているカーンの設計した、シンプルで物静かなミュージアムは対称的である。よく現代建築の構成の議

論の対象になった建物である。

又、有名な建築家によって作られた、多くの現代建築を代表する建物が、イギリス・ゴシック風の建物のキャンパスの中にうまくとけ説け溶けあっている。そしてイエール大学の建築学部では、常に多くの世界の著名な建築家が来て教えており、建築を学ぶには申し分のない環境の中にあっただ。

キャンパスをひとまわりすると、昔の思い出がよみがえってきた。私の人生のターニングポイントとなったところである。しかし、イエール大学の大学院を卒業した後も、私の人生は決して平坦ではなかった。私はアメリカの東部、南部、それに西部と巡り、全部で10社近くの建築設計事務所で働いた。これはつまり私の建築家としての腕を磨く為の修業時代であった。

1986年、ロスアンゼルスに自分の設計事務所を設けた。最近、私の事務所で設計した建築の小さい工事現場が、西部のみならずアメリカ全土に広がっている。かつての建築の修業の場であったニューヨーク、ヒューストン、バークレー等の地にも工事現場があり、再度、その地を訪れる機会が多くなった。

その地を訪れると、過去と現在とが重なりあい、夢と現実とが重なりあった。

私は中学を卒業すると、まもなく羽田空港の近くの町工場に就職しなければならなかった。夕日に映えて飛び立つ飛行機を見ながらアメリカへの夢を託した。そしてそれらの夢を抱いて10余年、1971年4月1日、羽田空港からアメリカへと、私は飛び立つことが出来た。そして、私が自分の建築への夢を追い続けることが出来るのは、イエール大学以前のニューヨークでの修行や、日本での幼い頃の貧困と学歴の差別、これらの逆境から脱出する為にもがき、これらの逆境に向かって常に戦い続けてきたからではないだろうか。私のこれまでの人生は戦いの連続であった。単に建築家の修業の為の戦いだけでなく、「いかに生きるか」という戦いでもあった。私は常にベストを尽くして生き、「Second is nothing」というスピリットを貫いて生きてきた。

私は、幼い頃から青春時代を通して現在に至るまで、多くの逆境に向かって闘い続けてきた。それは、私に与えられた環境が私を満足させる環境でなかったからであり、また貧困と学歴で差別されるのが耐えがたかったからでもある。その結果、自分の能力以上のことをしようと努力し続けた。又、自分の能力の限界を知ろうとしていたのかもしれない。生きる為に自分の意志に反することはしたくなかったし、環境に流されて生きることもしたくなかった。常に新しい何かを求めて、自分にとってより良いと思える生き方をしようとしてきた。

私の人生で与えられた最も素晴らしいものは、自由というものであった。しかし、この素晴らしい自由というものは、すばらしさの反面、私にとって試練の連続となった。連帯責任を主張する日本での自由と、個人主義を主張するアメリカでの自由とはだいぶ異なる。どちらにしても自分の意志をつらぬいて生きることは楽ではない。若くして、建築と自由

を求めてアメリカに渡った私は、一人の建築家として自立する以前の問題として、アメリカにおいて「人間としていかに生きるか」という問題に悩み、闘わなければならなかった。私が日本で得た「価値ある人間は、苦勞の中から生れる」という人生観とは異なり、アメリカの社会においては、「いかにして自己主張するか」が人間の価値観に繋がっているからである。

アメリカにおける私の建築家としての体験を語る為には、いかに生きてきたかということも同時に語らなければならない。イエール大学のキャンパスを歩きながら、そう思った。